

藝術学関連学会連合第 11 回公開シンポジウム

『政吉ヴァイオリンがニュースになるとき』

井上さつき（日本音楽学会・愛知県立芸術大学）

今回は日本のヴァイオリン王といわれた鈴木政吉の高級手工ヴァイオリンの発見と、それが再評価されるまでの道のり、さらに、それが新たな展開を生んでいることを発表する。それは、実在する楽器の存在が歴史の見直しをさせるという例であり、「ニュースを創り出していくアート之力」であると考えからである。

名古屋に生まれた鈴木政吉（1859-1944）は、尾張藩下級武士で三味線作りを内職にしていた父の後を継いで三味線屋になったが、明治 20 年（1887）に初めてヴァイオリンを目にし、見よう見まねで第 1 号を完成させ、その製造へと身を転じた。その 2 年後、政吉は第 3 回内国勸業博覧会にヴァイオリンを初出品し 3 等有功賞を獲得し、さらに、1893 年にはアメリカのシカゴ・コロンプス万博の楽器部門にヴァイオリンを出品し入賞する。「すぐれた音質およびすぐれた技術と仕上がり」が評価されてのことだった。

分業制による楽器の工場生産をいち早く実現した鈴木ヴァイオリンは山葉のオルガンと並んで国内洋楽器生産のトップメーカーとしての地位を確立した。山葉の場合、アメリカの楽器産業が手本になったのに対して、政吉にはそうした手本は存在しなかった。彼はヴァイオリンを大量生産するための方策を一人で考案し、多くの機械を自分で発明し、特許を取り、工場では動力を早い時期から導入した。

第一次世界大戦中、鈴木ヴァイオリンはドイツからの輸入が途絶えた国々から大量注文を受けるようになり、政吉は事業を急激に拡大した。大正末年、ベルリンにヴァイオリンの勉強に行っていた三男、鈴木鎮一（1898-1998、スズキメソード創始者）がベルリンで入手したクレモナの古銘器ガアルネリを持って一時帰国する。政吉はこの楽器を手本に高級手工ヴァイオリンの製作に乗り出した。

高級手工ヴァイオリンをドイツやオーストリアへも輸出しようと考えた政吉は、息子たちに楽器を持たせて、ベルリンやウィーンの演奏家のところに宣伝に行かせた。その楽器について、ヴァイオリン愛好家として知られた物理学者のアインシュタインが賞賛しているほか、ウィーンフィルのコンサートマスターであったフランツ・マイレッカーやアルノルト・ロゼが推薦書を書いている。

しかし、鈴木政吉の手工ヴァイオリンは今日ほとんど知られず、楽器博物館にも所蔵されていない。その真価を探るには、実際の楽器を調べるしかない。新聞のコラムを通じて呼びかけたところ、探していた政吉の高級手工ヴァイオリンが愛知県で発見された。所有者である松浦正義氏の父上が政吉自身から 300 円で購入した 1929 年製の楽器で、ヨーロッパから持ち買った材料で作ったという話だった。

ヴァイオリン製作家の鑑定によれば、この楽器は高い技術によって製作され、材料も非常に上質で、表板はおそらくヨーロッパ産のアカモミ、裏は一枚板のカエデでユーゴ

スラヴィア産ではないか、ということだった。この楽器は愛知県立芸術大学に寄贈され、修復後、さまざまなコンサートで活用されている。ヴァイオリニストの桐山建志氏は、この楽器は同じ時代の外国製品にまったくひけをとらないと評価している。

その後、奈良文化財研究所の年輪年代学の専門家、大河内隆之氏からの依頼で、この楽器の表板を高解像度X線CT装置で分析したところ、実は輸入材ではなく、北海道の天塩川流域で採れたアカエゾマツで、量産品と同じ産地だったことが判明した。日本の現状から「良い楽器が国産材で作れるはずがない」という思いこみがあったことを反省させられた。

このように、政吉の手工ヴァイオリンの発見によって得られた知見は予想以上に大きく、楽器の存在が歴史の見直しをいざなっている。